

信仰の勝利 (11:39~40)

■はじめに

1. 手紙の背景と執筆目的

- (1) ヘブル人への手紙を書いた著者、そしてこの手紙を受け取った読者も、直接イエスを見聞きしたことはない第2世代のユダヤ人信者である。
- (2) この手紙が書かれた時期は、紀元64年から66年頃と推定される。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。
- (3) 一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。

2. 手紙の内容と11章

- (1) ユダヤ教の三本柱は、「天使」、「モーセ」、「レビ族アロンの家系の祭司による祭儀」である。著者は、手紙の前半で、神の御子であるメシアは、天使にも、モーセにも、そしてアロンにも優ることを教える。
- (2) 手紙の後半は、前半の教えに基づき、信者はどのように歩むべきかを説明する。その中で、11章は、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという部分である。

■前回までの内容

1. 時代を追って、信仰の先輩たちを見てきた。

- (1) 族長時代以前：アベル、エノク、ノア
- (2) 族長たちの時代：アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ
- (3) 出エジプトから荒野の旅：モーセの両親、モーセ、イスラエルの人々、ラハブ
- (4) 士師記の時代前期から二人の士師、ギデオンとバラク（時期的にはバラクが先）
- (5) 士師記の時代後期から二人の士師、サムソンとエフタ（時期的にはエフタが先）
- (6) 士師記の時代の後、王ダビデと最後の士師であり預言者であるサムエル
- (7) 「預言者たち」は原文では、「またダビデとサムエルと預言者たち」とあり、サムエルの後に続いた預言者たちを指している。

2. 預言者たちの群像：新約聖書で、主の兄弟ヤコブは、次のように語る。「苦難と忍耐については、兄弟たち、主の御名によって語った預言者たちを模範にきなさい」（ヤコブ5:10）

- (1) 王国の分裂直後、南王国のユダから出て来て北王国のベテルで預言し、獅子に裂き殺された無名の預言者、「神の人」。この出来事は、その後の背教の時代における預言者の心得を教えた。

- (2) 北王国では、そのあと、預言者エリヤとエリシャが、まさに背教の嵐の中を活動した。「羊やヤギの皮を着て歩き回り」(ヘブ 11:37) とあるのはエリヤである。
- (3) 南王国ユダの預言者たち
- ① ゼカリヤ：ヨアシュ王のとき「石で打たれた」(ヘブ 11:37)
 - ② イザヤ
 - アザルヤ(ウジヤ)王の死んだ年に召命を受け、ヨタム王、アハズ王、そしてヒゼキヤ王の時代まで、54年間の活動。
 - 預言者としての召命を受けたとき、イザヤは、あらかじめ次のように主から語られていた。イザヤの伝える預言を聞いても民は悟らず、預言の成就を見ても目を堅く閉ざすであろう(イザヤ6:8~10)。
 - 人間的な目から見れば、報われることのない54年間である。「のこぎりで引かれ」(ヘブ 11:37)とは、ヒゼキヤの次の王、マナセ王によってイザヤが殺されたことを指す(聖書に記載なし、ユダヤの伝承)。
 - イザヤの信仰の手本は、まさに忍耐である。
 - ③ エレミヤ
 - ヨシヤ王の治世第13年に預言者としての召命を受けた。ヨシヤ王は20歳くらい、エレミヤも同年齢であったと推定される。
 - エレミヤは、その後、最後の王となるゼデキヤ王の治世が終わり、エルサレムが陥落する年まで、41年間、預言者としての務めを果たした。
 - エレミヤの活動を一言でいえば、「あざけられ、むちで打たれ」(ヘブル 11:36)、公衆の前で足かせをかけられて辱めを受けるなど、苦難の連続である。
 - エレ1:8、17・・・エレミヤは主から「恐れるな。」と命じられていた。主がともにおられ、かならず助け出されると、主の約束を信じ続けた。彼もまた、忍耐の預言者であった。
- (4) 捕囚時代の預言者：ダニエル 前回まで4回に分けて学んだ。
- ① 第1回は、預言者エレミヤの活動をふりかえり、少年ダニエルが捕囚となった時期の時代背景を見た。
 - ② 第2回は、ダニエルがバビロンの宮廷で高位に着くまで
 - ダニエルは、バビロニア王国の全州を治める地位にあげられた。同時に、「バビロンのすべての知者たちをつかさどる長官」となった。
 - ダニエルの3人の同僚たちは、ダニエルの願いにより、バビロン州の事務をつかさどることになった。
 - ③ 第3回は、バビロン州に金の像が立てられたとき、ダニエルの3人の同僚たちの信仰の証し—ヘブル人への手紙 11:34「火の勢いを消し」が指す出来事、そしてネブカデネザル王が、神の前にへりくだるまで、を見た。

- ④ 第4回は、バビロニアの後継の王が高ぶって国が減んだこと、そして次のメディア・ペルシヤの治世下でダニエルはどのような立場に置かれたかを見た。このときダニエルは、謀略により獅子の穴に投げ込まれたが、神が遣わした天使によって守られたという記事がある。ヘブル人の手紙 11：33「獅子の口をふさぎ」とは、このことを指す。
- ⑤ ダニエルの生涯は、エレミヤを通して語られた主の命令と約束のとおり。「バビロンの王のくびきに首を差し出して彼に仕える民を、わたしはその土地にいこわせる。」(エレ 27：11)。神と地上の主人に、誠実に仕えた生涯(エペソ 6：5～8)
- ⑥ ダニエルの日課は、祈りと感謝・・・「いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた」(ダニ 6：10)
- ⑦ 世界史に関係する4つの預言が、ダニエルを通して与えられた。彼は4番目の預言を受けたのち、祖国への帰還を果たすことなく、その生涯を閉じた。捕囚になったのが15歳とすれば、84歳頃。
- ⑧ ダニエル書の最後は、次のように結んでいる。
「あなたは終わりまで歩み、休みに入れ。あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ。」(ダニ 12：13)
メシアの王国に、復活したダニエルが立つ。

3. 本日の内容は、これまでの信仰の先輩たちを振り返っての結論部分である。

□本日の内容 (ヘブル 11：39～40)

- 1. 39節 「この人々はみな、その信仰によってあかしされましたが、約束のものは得ませんでした。」
 - (1) 「あかしされた」・・・ギマルトゥレオウ 証言をする、証人を得る
 - ① 同じ用語が 11：4にある。「そのいけにえによって彼は義人であることの証明を受けました」。「彼」=アベルを義人であると証明してくださったのは、神である。
 - ② 39節でも、「この人々」=アベルをはじめとする旧約の先輩たちを認めてくださったのも、神である。
 - ③ この箇所の前、38節では「この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした」とある。これもまた、神が旧約の先輩たちを認めてくださった評価のこぼれである。この世は、彼らが無価値なものとして排除した。しかし、神の目からは、この世のほうこそ、彼らにふさわしい所ではなかったのである。
 - (2) 「その信仰によって」・・・彼らが神に認められたのは、信仰を通してである。

(3) 「約束のものは得ませんでした」

- ① 旧約の信者たちは、神の約束を信じていた。
- ② しかし、彼らは、地上の生涯においては、約束の成就を見ることはなかった。
- ③ 彼ら自身の個人的な事柄に関する約束については一部、成就を見たものはあった。しかし、イスラエル民族に与えられた約束やメシアに関する預言などは、その成就を見ることなく、彼らは世を去っていった。
- ④ にもかかわらず、彼らは自分がこの世を去る瞬間まで、神の約束を信じていた。彼らは、神の約束がいつの日か必ず成就すると信じて、未来を望み見ていたのである。彼らは、そのような信仰の中で、死を迎えていった。
- ⑤ なぜ、神は、旧約の信者たちが神の約束の成就を見ることなく死んでいくことを許されたのか。そのことは、次の40節で教えられる。

2. 40節 「神は、私たちのために、さらにすぐれたものをあらかじめ用意しておられたので、彼らが私たちと別に全うされるということはなかったのです」

- (1) 旧約時代の信者たちが約束の成就を見なかった理由・・・旧約時代の信者たちが、私たち新約時代の信者たちを別に〇〇されるということはない
 - ① 神は、旧約時代の信者たちと、新約時代の信者たちとを、ひとつに合流して、両者が共に約束の成就を喜ぶように、計画しておられる。
 - ② もし、メシアの王国に関する約束がすべて、旧約の信者たちが生きていたときに成就したなら、そのあとの信者たちにはメシアの王国を待ち望むという余地はない。
 - ③ メシアの王国に関する約束がまだ成就していないから、旧約の信者たちも、新約の信者たちも、同じことを待ち望むことができる。
- (2) 「全うされる」・・・完成に達する、という意味。
 - ① 完成に達するとは、神学用語でいうと、「聖化の完成」であり、「栄化」である。
 - 人は、神の恵みにより、信仰を通して、救いを受ける。
 - 救いを受けたとき、信者は、神の目から見て、義人であり、完全に聖いという地位を与えられる。これを、神学用語で「義認」という。信者の内実が義人であり、完全に聖いということではない。信者の内側には、罪の性質は残っている。
 - 神は、信仰生活の中で徐々に、信者の内側を、その地位にふさわしく変えてくださる。これを「聖化」という。この神のみわざは、信者の地上生涯の終わりまで続く。
 - 信者が肉体の死を迎えたとき、すなわち、肉体から霊魂が離れたとき、その霊魂の内側から罪の性質が消去される。信者にとって、肉体の死は、罪の性質そのものからの解放である。
 - 聖化の完成は、復活のときである。肉体から離れていた霊魂に、ふたたび

体が与えられる。そのとき、信者の内側に罪の性質はなく、体はメシアの復活の体と同じ、不死の体、神の栄光を受けることのできる体、神の栄光の中で生きることのできる体である。これを「栄化」という。

- この復活は、教会の携挙からメシア王国建国の前までの期間に、成就する。新約時代の信者たちが一足早く、教会の携挙のとき。旧約時代の信者たちは、7年間の大患難期が終わってから75日の間で。(詳しくは、聖書フォーラムネットの福岡集会のページ、「死後の世界」2019年6月29日を参照ください)
- ② 彼ら＝旧約の信者たちも、私たち＝新約の信者たちも、別々ではなく、いっしょに、完成に達するのである。
- ③ すべての信者が、一人も欠けることなく、完成に達する。これは人のわざではなく、神のみわざである。それゆえ、信者は神を信頼して、苦難の中をも通ることができる。これが信仰の勝利である。
- (3) 「私たちのために、さらにすぐれたものをあらかじめ用意しておられたので」
 - ① 「女たちは、死んだ者をよみがえらせていただいた」(11:35)
 - ② 旧約の信者たち、とくに預言者たちは、「さらにすぐれたよみがえり」を信じ求めたから、「釈放されることを願わないで拷問を受けた」(11:35)。このよみがえりは、永遠のいのちへのよみがえりである(ダニ12:2)。
 - ③ 40節の「さらにすぐれたもの」とは、「全うされる(完成に達する)」ことであり、旧約の信者たちが信じ求めた「さらにすぐれたよみがえり」のことである。また、時代について言えば、「メシア王国の到来」であり、旧約の信者も、新約の信者も共に完成に達して、メシアの王国に入る。
 - ④ 完成に達することも、メシア王国が到来することも、旧約時代ではなく、新約時代を経てからである。新約時代の信者たちである「私たちのために」、それらの成就是新約時代を経てからとなるよう、神はあらかじめ計画しておられた。
- (4) 旧約の信仰の先輩たちは、私たちにとって、すばらしい手本である。ヘブル6:12は次のように語る。「あなたがたが怠けずに、信仰と忍耐によって約束のものを相続するあの人たちに、ならう者となるためです」。「あの人たち」とは、旧約の信仰の先輩たちである。この手紙の著者は、6章のところで、すでに旧約の信仰の先輩たちを思い浮かべていた。そして、11章でそのことを述べたのである。
- (5) 著者は、ここまで何度も読者に語りかけている。「あなたがたは、信仰をもっている」(ヘブル3:1、4:3、14、9:14、19、22、10:39)
- (6) 信仰を持っているのなら、迫害の中、苦難の中、落胆の中、そのような時こそ、信仰を用いるべき時である。11章で挙げられた旧約の聖徒たちのように、信仰による忍耐を発揮しながら、信仰を表していこう。これが、ヘブル人への手紙の著者が、

読者たちに伝えたいことである。

- (7) それで、12章1節へとつながる。「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けようではありませんか」。
- (8) 次回は、12章に入ります。

□ (私見補足) 新約の信者たちは、旧約の信者たちよりもすぐれているのか?・・・新約の信者たちには、旧約の信者たちにはない、特別な地位がある。ヘブル11:40で、「神は、私たちのために、さらにすぐれたものをあらかじめ用意しておられた」とあるのは、そのことを指しているのではないか?

1. たしかに、新約の信者たちには、旧約の信者たちにはない、特別な地位がある。
 - (1) 教会の信者たちは、「メシアの花嫁」となる
 - (2) 教会の信者たちと、大患難期の殉教者たちは、「メシアと共同統治者」となる (黙20:4)
 - (3) 教会の信者たちは、「御国の相続者」
 - ① エペソ1:11・・・ユダヤ人信者は「御国を受け継ぐ者」となった
 - ② エペソ3:6・・・異邦人信者もまた「共同の相続者」となる
3. しかし、11章全体の文脈は、旧約時代の信者たちを手本として挙げている。新約時代の信者たちの方がすぐれているという教えはしていない。
4. ヘブル人の手紙の中では、「すぐれたもの」と「さらにすぐれたもの」との比較対比で、教えが展開されている。
 - (1) 天使もすばらしいが、御子はよりまさる存在である。モーセもすばらしいが、御子はモーセよりもまさる者である。レビ族アロンの家系の祭司職も良い働きをしたが、それは御子によって終わり、御子の祭司職はアロンよりもまさるものである。
 - (2) 11:35~40の文脈は、「よみがえり」(蘇生)と、「さらにすぐれたよみがえり」(復活)との比較対比である。蘇生を受けることもすばらしいが、復活はさらにすぐれたことである。
 - (3) 11:40の「さらにすぐれたもの」は、同じ40節の中にある「全うされること」を指していると見るのが自然な読み方である。「全うされる」という表現の中には、「さらにすぐれたよみがえり」(復活)、聖化の完成=栄化、メシア王国に入ることなどの意味が含まれる。まさに、旧約の信者たちも新約の信者たちも共に待ち望んでいることである。